

## 手の労働の一つの体験

森 下 一 期

近年、子ども達から手労働が失なわれてきている状況が、ますますはつきりしてきました。いわゆる「技術革新」、高度成長政策が子どもの世界をも市場として食い荒し、子ども達から創造的な遊びを奪い、自からの手で考えながら創り出す喜びを奪ってきています。

そのような状況を憂え、何とかしようと私達は、「子どもの遊びと手の労働研究会」を発足させ、種々な角度からこの課題にとり組みはじめました。一つのとり組みは、これまで、種々な場で行なわれてきた経験を集約し、その中から学んでいくことです。その一つとして、私自身の私的な体験ではありますが、高校の頃特にこのようなことを意識することなく、自分達でとり組んできた労働の経験とその中で大事だと感じた点を報告したいと思っています。

### 部室をつくろう

1960年前後の高校は一般的に施設もとのっていないと言えます。都立大附属高校も、一定の敷地、建物はあっても、生徒が自分達の管理で使える部分は、古い体育館の一部ぐらいしかない状態でした。

クラブ活動がかなり活発になるにつけ、部室の要求は必然的に出てきます。それが“自分達で部室をつくろう”という所に発展しました。

そこに至るまでには、確かに一定の条件はあります。生徒自治会がそういう生徒の要

求をとりあげるように組織されていた事とか、先きに述べたような、クラブの自主的な発展があったとかは、この要求をつき出し、組織していく背景が確立していたこととしてまずあげられます。しかし、一方で、一人の教師が自分の家を自分でつくっていた、といった事の刺激、その教師の技術、生徒の技術的なものへの関心といったものも見落せないことだったと思う。

そこまで至る経過を若干思い出して見るなら、私は極めて消極的な子どもではあったのですが、工作的なものには極めて強い興味をもっていました。一方同じクラブの友人が、自治会の委員長をしていたことが重なり合いました。こちらは技術的な関心から“やりたいなあ”と考え、一方は、生徒の自治活動として面白いだろうということが合わさって、集団的にとり組むことができたのだろうと思えます。

1959年、高校2年の秋からとり組みが始まりました。友人は自治会として部室づくりにとり組むよう組織し、学校と交渉を行ない、私は、さしずめ技術主任として、教師に食いつきながら設計をはじめました。

雑草の生い茂っている所に、かつては部室であったろう焼跡があり、土台が残っていたのが、その基礎になったのです。巾2.5間で、1.5間づつ、4つか5つに区分けされており、とりあえず、1つをと、3.75坪の本建築に近いものを考えました。

学校との交渉では許可を得る一方、木材を用意させることができ(10万円ぐらいだっ

たと思います)、各クラスでも承認を得ることができました。イメージをもってもらうために、構造の見取り図を透視図法的に描き、もう一人の友人が、ガリ板ずりをして、全校生徒に渡しました。そのクラスでの承認は、みんなでつくろう、ということであり、実際の作業に毎日、交代で数名ずつ出てくる、といったものでした。

このような体制をつくったことは、単に、組織的なものを求めたというのではなく、それだけのものを建築するには、実際、集団的組織的に行なわねば出来ない相談だからです。

このあたりの準備過程は、自分達で考え、作り出してきたものとしか意識していません。教師の指導があったとすれば、実に見事に、生徒が自分の力でもって遂行したように思わせる、素晴らしい指導だったと思います。

このような自主的なとり組みが行ない得たのは、記念祭という文化祭を自からの手でつくりあげていた力が蓄積されていたからだろうとも思います。

## 設 計

設計図等がどうしても見当らず、載せることができないのですが、日記とか、記憶をたよりに、建築の過程をふり返ってみます。

1959年暮に、準備段階を終え、木材の購入が行なわれました。美術・工芸室の前の中庭につみ上げ、設計図をもとに、新年から作業に入ることを心待ちにしていました。

設計をする段階がどうもはっきりしないのですが、正投影図をきちっと書いた記憶がありません。指導をしてくれた先生は、人文地理の先生でしたが、その先生がかいてくれたようでもありません。透視図による全体図をかく中で——それをかくために——窓の位置、柱の数、屋根をどうするか、梁はどうするか、貫きは、とかいったことを相談してきめていったようです。全体図は、骨組みのものであ

ったので、そんなことすんだのかもしれませんが。それをもとに、一本一本の木材については、部品図を別のノートにかきました。屋根になる部分も別にかいて、つかの長さを決めたりしました。

こうやって考えて見ると、全く無茶なことをしたものだと思います。後にみるように、その結果は、いろいろな個所で人による食い違いを見せました。中学の職業・家庭で、製図のほんの入口をのぞいた程度ですから私自身知らないのが当然ですし、仮にかいたとしても、仲間が理解したかどうかわかりません。

唯一つ、印象に残っているのは、美術の先生が、旧制中学のと思われる図学の教科書を見せてくれたことです。残念ながら、バラバラと見ただけでは、すごいな！ 見事にきちつかいてあるけど、チンプンカンプンだな、と思ったにとどまりました。図学として、系統的に教えられていれば、もっと有効にとり組めたのではないかと考えざるを得ません。

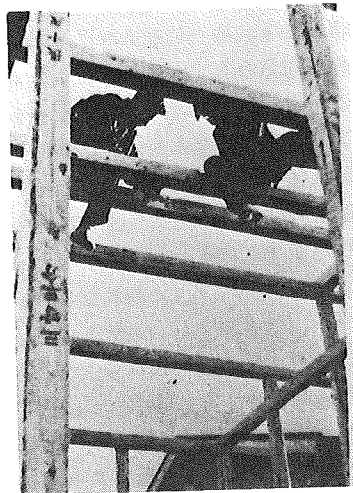
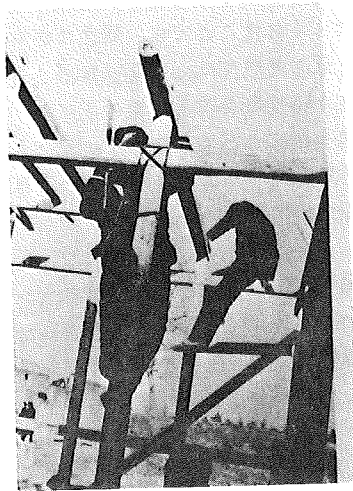
## 作 業

初夢にまで、作業している姿を見て、いよいよとりかかりましたが、2年の3学期というところで、大学受験のことも気にかかり、勉強しなければならぬという気持ちと、作業をしたい、という気持ちが常にぶつかり合っていました。結果的には、毎日、放課後は6時近くまで時には授業をさぼってくいついて、家には、図書館で勉強してきた、などとごまかす程、熱中していました。

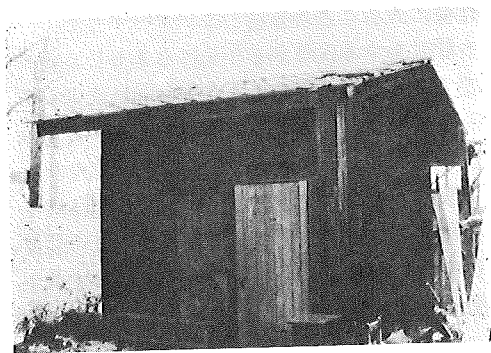
具体的な進め方は、毎日、クラスから(日によって、クラスが違)数名ずつ参加してもらい、技術面で中心となっている2、3名が、交代で指導する体制です。日記によると、「今日の当番は僕ではないが、〇〇はどっかへ行ってしまったので、致しかたなく、やはり、僕がやることにした。〇〇も女子にノミをつかわせてみたと言ったので、僕も他の仕



もうすぐ建前。心もはやる。  
右下の写真のハリに乗っ  
ている二人のうち、右側が筆  
者。



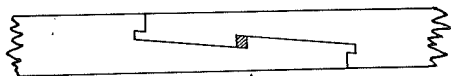
10年以上たったいまも、  
建物は残り、テニス部の部  
室として使われている。



事がなかったのでやらせた。ちょっと可愛そうにも思えたが、いい経験だろうと思って無視した。

ぬき穴の墨付は、全て女子にやってもらったのだが、あらためてみると、実にきたない、無神経である。女子だからいねいにやるだろうと普通の人は思うだろうが、また彼女等も、そのつもりでやっているのだろうが、なれないのか、不器用なのか、表と裏がく違っている。全くいやになる(1/18)。

柱の加工で印象に残っているのは、梁の連結です。基礎が2間半であるため、どうしても、つなげなければならず、下図のような加



工をしました。何日かかけ、やっと仕上げ、意外とうまくはまった時の喜びはわすれられません。自分の技術を誇りたい気持ちで一杯になったものでした。

苦しかったのは、何と言っても、カンナがけです。長い柱を削った時、マラソンをしたあとのように息切れし、苦しくなり、カンナがけの大変さをあじわいました。

一方、土台のコンクリートのボルトが全くダメになっていましたから、とって、埋めなおす作業も印象的です。タガネをどこにあてたら大きく欠くことが出来るかを考えながら、数回ふれば、腕が上がりなくなるようなハンマーで、何ヶ所にもとり組みました。

思い出せば、どの作業にも、この腕がやってきたのだという実感があります。

### むねあげ

さて、いよいよむねあげとなりました。何人かの教師の手をかりながら、日の暮れる中で焚火をもやしながら建てました。その日は、柱を立てる程度で終わりましたが、体育の教師が、まだ組み上らない柱にハシゴをかけ、槌

をふるう姿を見て、“やりたいなあ”と思っていました。翌日からは、屋根となる部分をのせていくのですが、そこは自分達の手でやりぬきました。

「朝6時半にパット起き、出かけた。今日こそは柱の上で思うぞんぶん働いてやろうといさみたって出かけた。幾何は休みだろうと思って行ってみたら、なんのことはない、ちゃんと来てやがる。いやあーな、なんとも言えない気分だった。出ようか、出まいかまよったあげく、試験をやりそうだったので出てしまった。失敗だった。

もうやけである。〇〇と現場に行ったら、〇〇と〇〇が必死になってやっているの、つい英語もさぼりたくなり、さぼってしまった。

まず、柱の打ちつけから。本当を言っておわかった。片方の足をハシゴにからませると言っても、あの重い槌を頭の上までかかけると、どうしても手がふるえきみになってしまふ。それでも、それはよかった方で、ハシゴなしで、向きを変える時のおそろしさ、何も手がかりがないので、中ぶらりんみたいになる。のぞけるようで、背筋がヒヤリとした。

しかし、慣れとはおそろしいもので、つかやむな木が上ってしまう頃には立って歩ける位になった。……(1/29)」

そして、骨組みが完成した所で、前の広場で生徒集会を開き、みんなの見ている前で、むねあげの日付をきざんだ板を打ちつけました。

そこに至るまでには、一本一本の柱の加工ですから、進行具合が良く見えず、人が集まらないとか、墨付を間違えたとか、種々なトラブルがあったように思います。その中で、どうしたら集まってくれるのかとか、技術指導はどうしたら良いのかとか、その場その場で考え、やっとたどりついたと言えます。

その頃の私は、人を指導するような経験は全くなく、前に出てしゃべることなど一度も

したことがないのですが、生徒自治会で組織的にとり組む中で、私自身も大きく変わったことをふり返る中で見ることができます。その頃は、自分自身しか見ることはできませんでしたが、このようなとり組みを行なう生徒自治会が、60年安保の中で、全校生徒の半分以上がデモに参加するといった意識と結束を示したことで無関係ではないと思えます。

社会的に目ざめている者は早くからその課題にとり組んでいましたし、クラブに熱中していたものも、技術的なものみに興味を示していたものも、自治会としての主体的な活動を行なう中で、共通の意識と理解をうみ出したのではないでしょう。

部室建築の真実中の1月16日に初めてデモに参加した事を考えると、高校生という時期に経験し、学んだことは、自分にとって、はかりしれないものがあることを感じます。

なお、外装は、その年度に自分達でやりましたが、内装はその後工芸の授業で行ない(予算がなくなるとか、中心になっていたものが3年になったなどで)完成され、現在はテニス部の部室になっています。

手の労働が子どもの教育の中で持つ意味が徐々に実践的に明らかにされてきつつありますが、共通して、自然科学的および技術的課題、集団の形成、労働への接近等の課題が含まれています。まだ十分には整理されていませんが、低学年ではそのとり組みの中で種々

な力を養い、基礎的な教科の学習の基盤をつくり、同時に、自分の生活をつくる力を養っていくように思えます。高学年でも、基礎的な教科の学習と結合した時、その知識が力として身につく、単にその場の生活のみでなく、生き方にもかかわるものを学びとる場にもなるように思えます。

幼児・児童のとり組みはいくつか出されはじめていますが、中学、高校ではどう組織され、幼小の頃のものが発展させられるのか、大きな課題となっています。私が経験したことは、15年前のことであり、機械的なものを含まないものであるので、限界はあると思いますが、技術教育を系統的に学習した上に行なうなら、もっと多くの事を学ぶ場となるように思います。しかし、生活に根ざし、自主的に組織されることこそが、重要だと思えます。

「労働と教育」の課題が実践的な課題となつてまだ日が浅いと言えます。これまでのとり組みの中から学ぶことと同時に、仮設をもって各学校段階で実践していくことが強く要請されていますが、「子どもの遊びと手の労働研究会」も、1973年11月に発足して以降精力的にとり組み、問題提起をしてきています。ぜひ、会報等をお読みいただきたいと思えますと同時に、実践等を反映させていただきたいと思えます。

(和光中学・『子どもの遊びと手の労働研究会』世話人代表)

---

<付> なお、「子どもの遊びと手の労働研究会」の連絡先は、下記のとおりです。

〒211 川崎市中原区木月451

森下一期方

電話 044-422-2570